

ヨーロッパの旅

——ウィーン——

平井信義

シュビール教授が主宰する実験学校を訪れる約束をして彼と別れると、私は一旦ホテルに帰り、その夜は市民劇場へ喜劇「蝙蝠」をききにいった。

劇がはねたのが十二時近くで、一日の盛りたくさんなスケジュールを終えて、ベッドにもぐり込むと、私は昏睡した。しかし、目覚し時計が六時半に鳴ると、いさぎよく飛び起き、きれいにひげを剃った。歐洲のホテルのほとんどが、自分の部屋でちよつと栓をひねればたちまちに熱い湯が出る仕組みになっている。それでタオルをむして、顔に当てた時の感触は、今でも忘れ得ない。七時に食堂で朝食をすませると、地図を頼りに市電に乗った。都心からかなり離れた第二区に学校がある。シュビール教授とは八時に待ち合わせる約束がしてあったので、急がなければならぬ。

学童たちの姿がほとんど消えかけた街路を走るようにしてその学

校についたのが、八時五分であつたらうか。

受付けて案内を乞うと、右側の階段を登って行ってくれという。

既にシュビール教授から私のことが通じてあつたらしい。私が階段を上りかけた所へ、鼻歌を歌いながら現れたのがシュビール教授。

マントの腕を通さずにひっかけている。

「ようこそ。待っていました」

彼は気軽にいった。

「先ず、私の部屋に来て下さい。それから各教室を案内しましょう」

「ダンケゼア、たいへんうれしいことです」と、私は彼のあとに従った。

ふらふらとマントの腕をゆさぶりながら、そして再び彼は鼻歌を歌いながら、職員室に通ずる廊下を先導していく。私は、何か非常

シュビール教授の主宰する実験学校。主として生徒によって課業が進められていく。



持が折目正しく礼をするからおかしくなるような気がした。精神衛生の立場から実験学校を経営してい

に気易い気持になった。

西ドイツにいた時は、教授といえはそれはいかめしい存在であった。ある医局員は「ハルプゴット（半神）ですよ」と私に説明してくれた程である。きまったようにいかめしい顔付きをしていて、うっかり側にも奇れない感じがしたし、現に私が教授室に呼ばれて二十分ほど話をしていたというので、医局員からいぶかしく且つうらやましく思われ、「何をしていたのか」と聞かれた程である。そのため、教授に会うといえは、私も一步退いて半神にぬかずかなければならないような気持になっていた。

持になっていた。

ところが、シュビール教授には全くそのような様子が見えなかった。お友だちにでもなつたように感じ、私がおかしくなるような気がした。精神衛生の立場から実験学校を経営してい

る教授の作る雰囲気、自然と波み取れ、精神科のノボトニー講師が教授を紹介してくれた意味がはっきりわかった。

オーストリア人はドイツ人と同じことばを使う。ことばの調子は少しちがうが、ほとんど同じ字句である。しかし、オーストリア人は「自分らはドイツ人とはちがうのだ」ということを言う。これは、ウィーンに長くいる友だちからきいた話であるが、シュビール教授と話していると、その話のことが蘇ってくる。ナポレオンやマリヤ・テレサの時代に、歐洲の文化の中心を形成したという雰囲気がある。日もお残っているせいであろうか……。

教授はまず、一年生の教室へ案内してくれた。中年の先生が、机を周囲に寄せて、子どもたちを一列に並ばせていたが、教授から私の話をきくと、私に握手を求めてきた。そして、「いま、交通訓練をしているのです」と説明した。子どもたちは初め、先生の指導に従って左を見てから右を見て、横断歩道をわたる、その練習をしている。歐洲大陸では右側通行の国が大部分であるが、やはり交通事故が非常に多い。事故死が幼児・児童の死亡率の主位を占めていることは、我が国と変わりがない。

先生の指導が終ると、子どもひとりひとり、順番に先生の代りをして。その間、先生は私の側に来て、

「このように、まず教室でひとりひとり訓練をしておいてから、校外指導をおこなうのです」と顔をほころばせた。「私どもの指導は、こうして、できるだけ実地に即しておこなうのです」

ウィーンはスケートのさかんな所。子どもたちのためのスケート場で彼らは嬉々としてすべっている。



横断歩道をわた

る訓練が終ると、代り番に交通巡査の役割が与えられた。手の上げ方が足りない、先生が注意をこぼす、うまくいかないと、子どもの側について手の形をなおしていた。

そのようなことで一時間をすぎる

ね」といった。「ご存じでしょうが問題児は問題家庭の子どもにも多いのです。その家庭にまで私どもの力が及ぶようになればいいのですが、なかなかそこまでは手が及ばない……」と言いつながら、二人のケースワーカーが共に働いていることを述べられた。

私は、このような学校にいる生徒、子どもを出している家庭の幸福を思いやると共に、我が国の小学校が五十人六十人の生徒をかかえ、問題児を放り出してしまっている状況を思い起こして暗い気持ちになった。

「うらやましいことです」と、私は繰返し言って、戦後の我が国の現状を話した。

「それはいけないことだ。本当の教育は出来ない」と教授はきっぱり言ったが、すぐ話題をかえるように、

「日本の子どもと、絵の交換をおこなうことが出来ませんかね」ときいてきた。

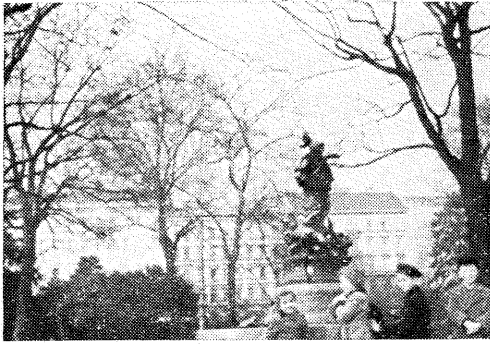
「私の大学にも付属小学校——すなわちあなたの実験学校のような小学校がありますので、校長先生に話してみましよう」と私はいった。しかし、その約束はまだ実現していない。いつか、小学校の先生に水を向けたが、あまり気乗りがなさらないようであったので、私はそれきり話を打ち切ってしまったのである。しかし、時折思い起こしては、何か約束を果していないような気がして、すまなく思っている。

次の時間は、中学の方に案内してもらった。中学二年の教室。男

と、私は校長室に帰った。
「どうでした？」と、度の強い眼鏡の奥からやさしい目がのぞいている。

「この学校では、一とクラス二十三人までとしています。ひとりひとりの精神的な管理をするためには、経験上これより多数の人数では無理だからです。こうして少人数でやってみますと、生徒ひとりひとりの家庭環境までしっかりと先生の頭に入り、本当の教育が出来ます。しかし、このようにしても、問題児は相当にあります

子どもたちが通学の途次、この像の前を往来する。
シュトラウスのヴァイオリンを持てる像。



女が約半々に、それぞれ入りまじり輪になって座っていた。入口に立った私に歩み寄ると、その教室の先生は握手を求めてから、生徒の方を向いて、

「日本から見えた私どものお客さんです」と紹介した。するとすぐに、女の子がひとり、中程の席から立ち上ると、つかつかと私の前に進んできて、手を差出しながら大きな声で

「ようこそいらっしゃいました。どうぞゆっくり参観して下さい」と言った。生徒の代表にちがいない。余りしっかりしており、その

行動が自発的であ

ったので、私はす

っかりどきまぎし

てしまった。そし

て、漸く

「皆さんにお会い

出来て、たいへん

うれしいことで

す」と口に出すこ

とが出来た。

我が国の子ども

で中学二年生にな

ると、自発的にこ

のような客のもて

なし方をする事が出来るだろうか。あるいは、うさんくさそうに横目では見ても、親しみの情をこめないのではないだろうか。先日アメリカ人を連れて長野県の中学校を訪れたことがある。廊下の窓にもたれて二人の男の子が私どもの通るのを眺めていたが、そのアメリカ人がそばに寄っていくと、二人とも背を向けてしまったのである。「いま、お休みですか」——そのアメリカ人が習いおぼえた日本語で話しかけても、二人で顔を合わせてニヤニヤしているだけで、返事をしようともしなかったのである。

ウィーンその女の子は、私の握手を受けると、足取りもすっかりと自席に帰った。そして、授業は再開されたのである。

その授業は、地理の時間であった。そして、ほとんどの授業が生徒によって運営されているという。それぞれの生徒が調べてきたことを発表し合いながら、主役になった生徒がそれを黒板に書いてきたり、まとめたりしている。先生は、うしろの座席で私の隣りに座って、それをじつと見ているが、重点があると注意をして質問したり、自分が出ていって黒板に書いたりしている。私は、すっかり楽しくなってしまう。そして、帰国後、既に二年半になるが「欧州での収獲は？」とたずねられる時には、きまってしまう。この学校を訪問した時のことを思い出す。私に挨拶をしてくれた女の子の顔も、手の感触も……。

その日の午後、私は再び市中にもどった。そして、市を内側で囲んでいる公園にいった。暗雲が低く垂れ、風と共に時に粉雪を送って

来るような寒い日であったが、私は午前中に参観した学校のことを楽しく思い返されて、公園の中の足取りも軽かったし、シェビール教授をまねて鼻歌さえも歌いたくなった。

間もなく、小さな銅像の前に出た。近づいてみると、ヴァイオリオンを持っている。「誰だろう？」と石にはめ込まれた銅板——しかしそれは青ざびていたが、その中に刻まれた文字を見詰めると、ヨハン・シュトラウス。まさに、シュトラウスの銅像であった。偶然のめぐり合いが、今日の日の私を祝福してくれるのかのように感じて、私はその像を仰いだ。

タラララ、タララ・ラ……流れ出るような口をついて出る春を讀めたシュトラウスのワルツ。私は自分の口ずさんだワルツに足を合わせながら、少し離れたベンチにまでもどると、そこに腰を下ろした。そして、冷たい空気を快く吸いながら、時のたつのに身をまかせていた。

辞任のごあいさつ

若葉の緑、いろ美しい季節になってまいりました。ますます御清栄のおんことおよろこび申しあげます。

さて私ことこの度、お茶の水女子大学付属幼稚園長を定年退職いたしましたにつき、日本幼稚園協会会長を辞任いたしました。前会長倉橋惣三先生の後をうけ、その職にありましたその間ながらく皆様がたの格別の御芳情をうけ誠にありがとうございます。深く感謝申しあげる次第でございます。

今後は本会の一役員とし、ひきつづき会のために協力させていただきますから何とぞよろしくお願い申しあげます。

及川 ふみ

就任のごあいさつ

及川ふみ先生の定年御退職のあとを受けて、私がお茶の水女子大学付属幼稚園長に就任することになりました。そのために、慣例にならって、私が、日本幼稚園協会会長をお引受けし、「幼児の教育」の編集主幹になりました。

及川先生は、その前任の故倉橋先生の場合とはちがって、御健在ですので、今後とも協力委員として御指導御援助を願うことになっております。また、津守真先生が従前通り編集主任としてはたらい下さいますし、歴史のある「幼児の教育」誌の声価をおとさないように、非力ながら努力するつもりです。から、よろしく皆様がたの御支援をお願い申しあげます。

坂元 彦太郎